

■バルトーク／弦楽のためのディヴェルティメント Sz.113

バルトーク・ベラ（1881－1945）は20世紀のハンガリーを代表する作曲家である。彼の創作は歌劇「青ひげ公の城」やバレエ音楽「中国の不思議な役人」などの舞台作品から弦楽四重奏曲、ピアノ作品にいたるまで多岐に渡っている。若い頃、それまで自国の音楽だと思っていたジプシー音楽ではなくて、マジャール民謡こそ祖国の民族音楽であることに気づいたバルトークは、演奏活動、作曲活動の間を縫って、1906年からハンガリー語が話されていた地域、さらにアフリカにまで足をのぼして広くフィールド・ワークを行い、古い民謡を収集した。1920年代にはマジャール民族の音楽から抽出した特性を印象派や新ウィーン楽派の技法と結びつける実験を行っていたが、30年代になると、より洗練された新古典主義的傾向をもつ構成へと傾いていく。

《弦楽のためのディヴェルティメント》はこの時期を代表する作品である。ナチスの台頭で、ヨーロッパの政情不安が人々を襲っていた1939年に作曲された。バルトーク自身も亡命を考えていたところで、現代音楽のパトロンだったパウル・ザッハーがそれを知って、スイスの自分の山小屋に彼を招いたのである。神経質で繊細な性格のバルトークは、オーストリアやハンガリーへのナチスの進出に脅威を感じて、作曲に集中することができないでいたが、ザッハーの山荘で大自然に抱かれて、ようやく創作の力を取りもどす。夏のひとときを、ゆったりと過ごすことができ、わずか半月程でこのディヴェルティメントを作曲。ザッハーが主宰するバーゼル室内管弦楽団が初演し、彼らに捧げられた。

この作品のおもしろいところは、マジャール民謡やジプシー風の音楽を含みながら、まるでバッハの《ブランデンブルグ協奏曲》のように、独奏楽器群と全合奏がくっきりと対比される伝統的なコンチェルト・グロッソの形態になっていることだ。第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが一人ずつの独奏部と、弦五部のトゥッティが対話する形で進んでいく。急・緩・急の3楽章構成で、自由なソナタ形式の第1楽章に、ゆったりとしたテンポで、ハンガリー風のメロディが織り込まれた3部形式の第2楽章がつづき、最後はロンド・ソナタ形式のフィナーレとなる。調性感のある部分と、社会情勢を映し出したような緊張感のただよう半音階的な部分が入り混じった独特の雰囲気をもつ作品だ。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。